

## 禅宗文化への憧憬

——『禅林小歌』『禅林小歌註』にみる浄土学僧の自己矛盾

上野麻美

### はじめに

『禅林小歌』（応永年間成立）は、室町期浄土宗の学僧了誉聖罔が吟じた「小歌らしきもの」である。本作品は、現存する諸本を見る限り、作品単独では遺っておらず、弟子の西誉聖聡が注記を付した『禅林小歌註』というかたちで存在する。したがって、現存『禅林小歌註』については、本体部分と注記部分は分けて検討すべきと考える。そこで本稿では、まず本体部分である聖罔著『禅林小歌』について論じ、続いて聖聡著『禅林小歌註』に言及することとしよう。<sup>(1)</sup>

先学に拠れば、『禅林小歌』および『禅林小歌註』は禅宗批判を目的とした著作とされ、室町期浄土学僧による他宗批判のありようを知るうえで非常に興味深い内容をもつ著作である。しかし、戯歌的な内容と形式で構成されるという一風変わった姿をもつゆえか、これまで本書に関して本格的な研究が試みられたことはほとんどなく、先行研究としてはわずかに柳泰純「『禅林小歌註』について」<sup>(2)</sup>があるのみである。

本稿では、先学が指摘した、聖罔の禅宗批判の意図を踏まえながら、その強硬な姿勢に矛盾して、彼が禅宗文化に強い憧憬を抱いていたのではないか、という私見を検証する。加えて、そうした師に忠実であった弟子聖聡の禅宗受容についても言及したいと思う。

## 一、聖岡の禪宗批判

まず始めに、聖岡が『禪林小歌』において禪宗批判を展開した背景を、当時の浄土宗教団の状況から確認しておこう。南禅寺の学僧虎関師鍊著『元亨釈書』巻第二七諸宗志には「寓宗<sup>(3)</sup>と評されるごとく、聖岡が登場した室町前期において、浄土宗は未だ独立した一教団としての組織を整えていなかった。それゆえ、他宗からの厳しい批判にさらされ、なかでも幕府の庇護下で隆盛を誇っていた禅宗からの批判は痛烈なものであった。その最たる例が、夢窓疎石による『夢中間答集』に見えるものである。<sup>(4)</sup> 夢窓は、浄土宗が念仏という易行を勧め、難行を嫌うことを批判し、「釈尊一代の説法、多くはこれ浄土宗より嫌はるる難行門の説なり―中略―如来は無知にして、かやうに枝葉の法門を多く説き給へるならむや」(八二「易行門と難行門」<sup>(5)</sup>)と問い詰める。さらに、「《仏説のなかに、実義をすっかり明らかにした了義経と、実義を隠して方便を説く不了義経の二種があり、我々末代の衆生は前者に依るべきで、後者に依ってはならぬ》と説いたうえで「凡夫の外に仏あり、穢土の外に浄土ありと説けるは、不了義の経なり。―中略―浄土宗には、穢土の外に浄土あり。凡夫の外に仏ありと、立てられたり。了義大乘の説とは申すべからず」(八三「了義・不了義」)と真つ向から否定している。

こうした批判にさらされるなか、浄土宗の中興を図り、教学の整備や伝法制度の確立を進めていったのが、聖岡である。聖岡は多くの教学書を記し、それを弟子たちに伝授した。聖聡はその第一の高弟である。聖岡は聖聡とともに、談義所を拠点とした学僧教育にも尽力し、教団組織の拡充を図ってきた。

そうした浄土宗教団内部の改革の一方で、聖岡が積極的に行ってきたのが、他宗からの批判に対する理論武装であった。それを最も顕著に表明したものが『破邪顕正義』(永和三年・別称『鹿島問答』<sup>(6)</sup>)である。本書は、常陸国鹿島神宮での、参詣の女と翁の問答の筆録という形態をとり、女が神道や仏教他宗派の説について問い、それに対して翁が答え

るかたちをとって、聖岡が自説を唱えるというものである。したがって本書は浄土宗に対する疑問や偏見に答え、浄土宗への帰依を勧める民衆教化を目的とした書と解される。

さて、問答形式に明らかなく、『破邪顕正義』は先に見た夢窓疎石の『夢中間答集』を強烈に意識して記された著作である。夢窓の浄土宗批判に対し、『破邪顕正義』において聖岡は翁の口を借りて「我、昔此の事を記さるる書（『夢中間答集』）を見て、大に驚て笑ひ今に休まず」（第八「夢窓国師以説教多少判難易二道之事」）、「我、また昔、彼の義（『夢中間答集』）を読む時、此の段に至りて即ち嘆息す」（第十五「夢窓国師以浄土判属小乘之事」といった、対決姿勢を露わにした語り出しから始める。聖岡は夢窓の批判に対し、あらたに二蔵二教の教判を組織し、『華嚴宗・天台宗・禅宗などの教えは唯理唯性を論ずる抽象的な理論にとらわれた教えであるから、性頓教と名付けるべきものである。浄土門の教えは事と理の相即縦横を論ずるものであるから、相頓教といふべきである。浄土門のいう頓とは事理具頓の頓であり、仏意の一乗、即相不退、見生無生の教えであるから華嚴宗・天台宗・禅宗が説く性頓教の教えよりすぐれたものである』と説いて、浄土門が深遠な思想体系を有する教えであることを力説している<sup>(8)</sup>。

夢窓の説に反論しつつ、聖岡は浄土宗の正当性を主張しながら、痛烈な禅宗批判を返している。こうした例にみるごとく、浄土宗中興を図る聖岡にとって、禅宗は敵対する一派であったことは明らかである。

『禅林小歌』は、まさにこうした背景を負って記された著作である。聖岡は『禅林小歌』において、『宗鏡録』『碧巖録』など禅宗で重んじられる教学書を列挙し、「祖師の語録は多けれども文字さらに闕けたれば其の理を読む事能わず。声菩二蔵の教門も是る機には益無き也」と断じ、「教外別伝不立文字の修行に真理の処なし」と、禅宗における二大中心教義を真っ向から否定している。

こうした内容から見て、従来説の通り、『禅林小歌』を禅宗批判の書と解することに誤りはない。しかし作品を深く読み込むと、表面上の批判的な姿勢とは矛盾する「ゆかしい」気分をもって書かれた著作だという印象をぬぐえない。

では、そうした印象を生む源はどこにあるのか。以下、検証していこう。

## 二、聖岡の禪宗撰取

さて、前項において聖岡の禪宗批判の様子を確認したが、その内容を見るに、聖岡が敵対する禪宗の教義にかなり明らかなったことが読み取れる。そこで検討を要するのは、浄土僧の聖岡がどこで禪宗を学んだのか、という点である。

『破邪顕正義』の冒頭には「余、髫年の当初より偏に心を講肆しに留めにき。五五歳の末より専ら眼を其の扉に掛く。爾より已来、南北に往還し東西に遍歴すれども」と記され、これは聖岡が二十五歳のとき始めた遊学の旅を指すものと解される。こうした学僧の遊学は、学僧の教育機関であった談義所を拠点として、室町期には各宗で盛んに行われていたらしい。聖岡の師了実、聖岡の弟子聖聡も遊学の旅に出ている<sup>(9)</sup>。また、談義所は各宗派がそれぞれに経営していたが、そこに他宗派の僧侶が学ぶ例もあり、学僧たちの宗派を越えた交流は活発に行われていたようだ。

『了誉上人伝』<sup>(11)</sup>をはじめとする聖岡の諸伝には、彼は真言を祐存（宥尊）に、天台を真源に、禪を月庵と天命に学んだと記され、これは先にみた聖岡二十五歳の遊学の旅の履歴と重なるものと解される。

さて、ここで注目すべきは、遊学のさいに禪宗を学んでいるという点である。聖岡が教えを請うた月庵宗光は妙心寺流の僧で元に渡って修行したが、延元二年（一三三七）には茨城郡古内（常北町）の清音寺に復庵宗己を訪ねており、貞治六年（一三六七）には但馬に大明寺を開き、そこに住した<sup>(12)</sup>。また、月察天命は瓜連弘願寺の開山大拙祖能の弟子であったらしい<sup>(13)</sup>。

聖岡はこの二人の禅僧に参じ禪宗の教義を学びつつ、禅家からの批判に対する浄土宗側からの理論武装を図ったものと思われる。この遊学の後、彼が最初に著したのが『破邪顕正義』であったことからも、その研鑽の目的が知られよう。

### 三、『禅林小歌』に描かれた禅宗文化

さて、こうして禅僧のもとに参じて聖罔が学んだものは、教義だけに留まらず、禅宗寺院を舞台として当時隆盛した文芸を含む、禅宗文化全体であった。この点については、まさに『禅林小歌』そのものが饒舌に語るところである。

『禅林小歌』は冒頭で「唐様と号して室を飾り衆を集め興を催す宴有り」と場面設定を説明し、その後、宴会場の室礼、供される料理、食器、茶、香、道具類について詳細な記事を列挙する。それらはいずれも禅宗文化を象徴する「唐様」つまり中国文化に強く影響されたものであった。

当時の禅宗寺院は、中国から高僧を招いて教えを受けることを積極的に行っており、また中国へ留学する僧も少なく<sup>(15)</sup>なかった。ゆえに自然と寺院内での文化も唐様に染まっていったのである。

ここで注目したいのは、『禅林小歌』に記される、宴を演出する装置「山水向の会処」を説明する記述が、室町前期の禅宗寺院での「会所」の様子を鮮やかに描いているという点である。

会所とは、広義には各種会合のために人々が集う場所をいうが、狭義には中世に特徴的に見られる遊興のための部屋、あるいはそれを目的とした専用の建物をいった。<sup>(16)</sup>そうした会所では茶会も行われており、『喫茶往来』<sup>(17)</sup>（南北朝後期）室町初期成立）にはその様子が詳細に記される。ここに『喫茶往来』が記す、会所の室礼を説明した部分を引いてみよう。

左は思恭の彩色の釈迦。靈山説化の粧巍々たり。右は牧溪の墨絵の観音。普陀示現の姿蕩々。普賢文殊を脇絵となす。寒山拾得面飾となす。前に重陽、後に対月。不言丹菓の脣吻々。無瞬青蓮の眸妖々。卓は金欄を懸け、胡銅の花瓶を置く。机は錦繡を敷き、鍬石の香匙火箸を立つ。嬋娟たる兮、瓶外の花飛。

一読してすぐに気付くのは『禅林小歌』の記す会所の室礼の様子に共通する点が散見することである。『禅林小歌』

でも、元代の画家とされる張思恭が描いた釈迦像三尊像や、宋代の画家牧溪の牛の画など、中国の画家の絵を会所の室礼として飾ると記されている。また、卓に金欄を敷き、香匙・火箸・花瓶といった唐物の道具類を飾っている点も同じである。

さらに、注目すべきは、『喫茶往来』に記される会所でも『禅林小歌』と同様「鬪茶」が行われている点である。鬪茶とは、茶の産地によって本茶と非茶とを飲み分け得点を争う遊びで、本茶を梅尾茶（室町時代は宇治茶）とし、それ以外の産地を非茶とした。<sup>(18)</sup> 左に『喫茶往来』に見える鬪茶の記事を引いてみよう。

亭主の息男、茶菓を献ず。梅桃の若冠、建盞を通す。左に湯瓶を提げ、右に茶筥を曳く。上位より末座に至るまで茶を献ず。——中略——或は四種十服の勝負。或は都鄙善悪の批判。啻に当座の興を催すにあらず。将に又生前の活計なり。何事かこの如し。盧同云く「茶少なく湯多きは則ち雲脚散る。茶多く湯少きは則ち粥面聚まる」と云々。

右に見える「四種十服」とは、四種の茶葉を十杯に配したものを各人が飲み、各杯の種類を当てるといふ、鬪茶の基本的な形式であった。鬪茶には種々の遊び方があったようで、『禅林小歌』に見える鬪茶に関する記事では、「十服茶」「二種四服」「四季三種」といった形式の名称と簡単な内容が記されている。また、右に見える唐代の詩人盧同の言葉は、『禅林小歌』にも記されている。

このように『禅林小歌』と多くの共通点をもつ『喫茶往来』が描く、会所および茶会の様子については、禅宗寺院における茶礼の影響が指摘されている。<sup>(19)</sup> この点から推測するに、『禅林小歌』も当時の禅宗寺院の会所および茶会の様子を鮮やかに写し取ったものと考えてよいだろう。

こうした禅僧たちの唐様趣味の様相を、聖岡は月庵宗之、月察天命に参禅したさいに、禅の教義とともに見聞きした



と考えられる。

また、聖岡は諸伝によると、和歌を頓阿に学んだとされる。実際、聖岡は和歌にも造詣が深く、『古今和歌集』の序を注釈した『古今序註』を記していることから、頓阿に学んだという伝は信憑性の高いものである。頓阿は足利將軍家にも重用された、京都在住の歌人である。したがって聖岡の遊学は京都にまで及んだと考えられ、実際、聖岡の伝記には彼が京都を訪れたと記す『新撰往生伝』(寛政五年序)<sup>(20)</sup>や『了譽聖岡禪師絵詞伝』(文政五年刊)<sup>(21)</sup>が存在する。足利將軍家に重用された頓阿に師事しながら京に住まう聖岡が、室町幕府の庇護下にあった京都五山を中心とする禪宗文化に触れることはごく自然なことであったと思われる。

あるいはその機会は京都以外でもあったかもしれない。『浄土本朝高僧伝(浄土鎮流祖伝)』(正徳三年刊)<sup>(22)</sup>や『新撰往生伝』(寛政五年序)<sup>(23)</sup>には、聖岡が鎌倉建長寺を訪れたさい「禪林小歌一篇」を詠んだと記され、聖岡の遊学先のひとつに鎌倉建長寺があった可能性を示唆する記事として注目される。建長寺は鎌倉五山第一の寺格をもち、夢窓にも縁が深く、宋・元の僧侶の来朝が相次いだ寺で唐物禪宗文化花盛りの寺であった。管見の限りでは、聖岡が建長寺で学んだという記録は先述の伝記資料の他はなく、史実としては定かではないが、関東に住する聖岡が、建長寺の隆盛ぶりとその華やかな文化を見聞きしても不思議はない。

『禪林小歌』に見られる、聖岡の禪宗文化に関する知識の豊かさは、彼を取り巻くこうした環境の賜であったと言えるだろう。

#### 四、「小歌」と禪宗

さて、少し視点を変えて、そもそもなぜ「小歌」なのか、を検討してみたい。小歌とは室町時代中期以降に貴族・武士・僧侶・庶民の各階層に広く愛唱された流行歌謡をいい、比較的短い詞章と定形の音調をもつものである。こうした

小歌の特徴と照らし合わせると、『禅林小歌』はかなり異質な様相を呈していると言わざるを得ない。本作品の内容の大半は禅宗文化を象徴する様々な物の名、地名、人名の羅列で構成されており、それらの並べ方に一定の規則はない。形式から見れば往来物に近く、『異訓庭訓往来』には類似した記事が指摘されている。<sup>(24)</sup> 強いていえば、狂言小歌に分類される「物尽くし」の形式に類似するとみることができ、音調・音律がない点が一般的な小歌と決定的に性格を異にする。こうした事情ゆえか、この作品がいわゆる「小歌」の作例として研究された先行研究は管見の限りでは皆無である。

そのくらいにこの作品は小歌として認められていない「小歌」である。これを小歌の特異な一例と扱うか、小歌とは別物と見るかの判断をする用意は今はない。しかしながら聖岡がこの作品を「小歌」と称したところに、強烈な意図を讀むことができる。私は考える。

何より注目すべきは、室町期の小歌には禅宗の影響が色濃く見られる点である。<sup>(25)</sup> 小歌には室町期禅宗の五山文学の影響が早くから指摘されており、小歌集『閑吟集』の編者を禅僧と推定する説もある。<sup>(26)</sup>

『閑吟集』仮名序には「或は僧侶佳句を吟ずる廊下の声」<sup>(27)</sup>と語られ、小歌の担い手として僧侶の関与がはっきりと記される。『閑吟集』所収の小歌に關し、特に禅宗の影響が指摘されている点から判断して、ここにいう僧侶を禅僧とすることに問題はなからう。

先にみたごとく、室町期の禅寺では盛んに茶会や詩会が行われていた。小歌はそうした遊興に付随する宴会の場面で歌われることがあったと考えて差し支えなからう。まさに、「小歌」は『禅林小歌』が描く、禅僧たちの遊興の場を象徴する文芸であった。それを聖岡は作品の冒頭にいうごとく、痛烈な皮肉を込めて「笑吟」したのである。



## 五、弟子聖聡の注釈

さて、ここまで聖岡作『禪林小歌』について論じてきたが、次に、弟子聖聡によって注釈が付された『禪林小歌註』について触れておきたい。この注釈書に関して、榊泰純は聖聡の付けた注には、聖岡の指示によるものと、聖聡が独自に付けたものとの二種があると分析している。前者は「端的に覚え書き的に施され」後者は「しばしば本文とはかけ離れるきらいの感じられる、やや長文の注」として区別する<sup>(28)</sup>。しかし、榊が後者すなわち聖聡が独自に付けた注と解する玉泉坊説話は聖岡著『了誉古今序注』に載り、顔烏顔貌説話は聖岡著の説経台本と推定される「了誉草」(『当麻曼陀羅疏』卷二九)<sup>(29)</sup>を出典とする可能性が高いことから、榊の分類は妥当性を欠くと言わざるを得ない。したがって、聖聡の付した注記に関して聖岡の指示の有無を判別することできない。

そもそも聖聡が注を付すさいに聖岡の指示を受けたか否かが問題ではなく、師聖岡の著作に見える記事を、弟子聖聡が注記に使っている点に注目すべきではなからうか。聖聡は聖岡の高弟であり、当然のことながらその影響を強く受けている人物である。したがって、師聖岡を通して、聖岡も禅宗教義および禅文化に関する深い知識をもっていたと考えるのは自然であろう。そうした師からの教えが『禪林小歌註』に見る詳細な注記となったものと考えられる。

聖聡の年譜を見る限り、彼が聖岡のように禅僧に直接教えを請うた形跡はない。また、聖岡とは異なり、聖聡の著作には禅宗教義について触れた部分はあまりない。しかし、彼の著作には『林間録』『臨濟録』『宗鏡録』『大蔵一覽集』といった禅籍が引用されている例が少なくない<sup>(30)</sup>なかでも『大蔵一覽集』を頻用しており、『禪林小歌註』の注記に見える、雲居道膺・法融・破竈・高確率で文言が一致することから、いずれも本書から引用していることは明らかである。こうした点から、聖聡が禅宗の教義にも明るかったことが知られ、おそらく聖聡は師聖岡を通して禅宗教学を学び禅宗文化を知ったものと考えられる。

## おわりに——禅宗文化への憧憬

夢窓疎石は、茶や文芸に興じることを『夢中間答集』でこう戒めている。

唐人の常の習ひにて、皆茶を愛することは、食を消し気を散ずる養生のためなり。薬も皆一服の分量定まれり。過分なる時は亦たたりをなす。この故に茶をも飲みすぎすをば、医書にこれを制したり。昔、廬同陸羽等が茶を好みけるは、困睡をさまし、蒙気を散じて、学をたしなまむためなりと、申し伝へたり。我が朝の梅の尾の上人、建仁の開山、茶を愛し給ひけるは、蒙を散じ睡をさまして、道行の助けとなし給はむためなりき。今時世間に、けしからず茶をもてなざるやうを見れば、養生の分にもなるべからず。いはむやその中に学のため道のためと思へる人あるべしや。勝へ世間の費えとなり、仏法のすたるる因縁たり。然らば則ち、茶を好むことは同じけれども、その人の心によりて、損あり益あり。ただ山水を好み、茶を好むことのみにあらず。詩歌管弦等の一切の事も亦、かくのごとし。詩歌管弦そのしな異なれども、人の心の邪悪なるを調べて、清雅ならしめむためなり。然れども、今時のやうを見れば、これを能芸として、我執をおこさるる故に、清雅の道はすたれて、邪悪の縁とのみなれり。 (五七「仏法と世法」)

夢窓は「今時世間に」として、世間一般に広がる風潮を批判しているのだが、聖岡はそれに対して、『禅僧たちこそが、そうした風潮を蔓延させている張本人ではないか』と、唐物趣味や文芸に興じる彼らの姿を、戯れ歌に載せて禅宗を痛烈に揶揄したのであった。

しかしながら、その戯れ歌には、単に他宗を揶揄し攻撃するだけではないものを、私は感じとれると思う。先述のとおり、浄土宗僧でありながら聖岡も聖聡も禅宗文化に非常に詳しい。そこには当時流行の唐様文化への押さえがたい憧憬があったのではなからうか。

唐様趣味は、時の為政者たる室町將軍家の趣向するものでもあった。室町殿の唐様趣味に彩られた会所は、莊嚴を極めて豪勢な遊興装置として存在した。そうした時代の空気を吸った聖岡にも聖聡にもそれは憧れの文物であつたらう。先述のとおり聖岡は和歌に造詣が深かった。頓阿に師事し都の文化サロンを経験した聖岡にとって、会所で繰り広げられる遊興の会合に心惹かれるものがあつたことは想像に難くない。ゆえに『禅林小歌』および『禅林小歌註』を単に禅宗批判の書として片付けることに私は抵抗を感じるのである。

唐様を愛でる禅宗文化は、禅僧のみに留まらず、当時の文化人知識人の間で広く流行した。聖岡や聖聡がそうした流りに憧れを抱いたとしても不思議はない。聖岡が『禅林小歌』の冒頭で自らを作者として名乗るとき、「陰士聖岡笑吟」と記す意図には、単に唐様趣味に興じる禅僧たちを嘲笑する意味だけではなく、「戯歌ゆえにお許しを」といった弁解の意があつたのではないか。そこには、揶揄しつつも、自らもそうした文化に強く惹かれる、隠しがたい思いがあるように思えてならない。

最後に、こうした禅宗文化への憧憬がその後の浄土宗の動向にも影響している可能性を指摘しておきたい。伊藤真昭は、浄土宗中興祖であつた聖岡の活躍した時期以降、浄土宗寺院数が飛躍的に増加した中世末から近世初頭の浄土宗の存在形態について、禅宗との類似性を指摘している<sup>31</sup>。伊藤は京都知恩院を筆頭例に、中世後期京都の浄土寺院に、禅宗風の建物や禅宗風の服装の僧侶が存在していたこと、また三河国岡崎信光明寺を例に、禅宗風の建築様式が地方の浄土宗寺院にも波及していたことを指摘する。伊藤は、こうした両宗の類似性の原因の一つとして、王家の葬送を担う宗派として禅宗と浄土宗が接近した可能性を想定しているが、例えば聖岡や聖聡が抱いた、浄土宗僧による禅宗文化への憧憬がその素地を作つたのではないかと私は考える。

外来の文化に深い興味をもち、遠い異国の地に思いを馳せる楽しさは、どのような時代にあつても人々の心を魅了する。異国はおるか京の都でさえも遙かに遠い東国の片田舎に暮らす聖岡や聖聡にとって、唐様を愛でる禅宗文化は、よ

り一層強い憧れを抱かせるものであったろう。敵対する禪宗への痛烈な批判を目的としながら、一方で禪宗文化への隠しがたい強烈な憧憬を抱くという自己矛盾を抱えながら、「笑吟」した聖岡の諧謔にこそ、『禪林小歌』の真骨頂があるのではなからうか。

注

- (1) 以下、『禪林小歌』および『禪林小歌註』の引用は、拙稿「『禪林小歌註』(天和三年版『序語類要』の内) 翻刻」(人文自然科 学論集) 一三七号、二〇一五年三月) に拠り、原漢文を漢字平仮名交じり文に改めた。
- (2) 大谷旭雄編『聖聰上人典籍研究』(大本山増上寺、一九八九年十二月)
- (3) 藤田琢司編『訓読元亨釈書』(禪文化研究所、二〇一一年十一月)
- (4) 坪井俊映「禪宗徒の専修念仏批判」(『法然浄土教の研究』隆文館、一九八二年二月)
- (5) 以下、『夢中間答集』の引用は、川瀬一馬訳注『夢中間答集』(講談社、二〇〇〇年八月) に拠る。本文( )内は引用者注。
- (6) 伊藤正義「了誉伝稿」(『文学史研究』十五号、一九七四年七月)
- (7) 以下、『破邪顕正義』の引用は、『浄土宗全書』第十二卷(山喜坊仏書林、一九七六年八月) に拠り、原漢文を私に漢字仮名交じり文に改めた。引用文( )内は引用者注。
- (8) 坪井俊映「聖岡教学の浄土宗史上における地位——特に三巻七書を中心として——」(『仏教文化研究』三九号一九九四年九月)
- (9) 菊池勇次郎「中世における浄土宗鎮西義の展開」(笠原一男編『封建・近代における鎌倉仏教の展開』法蔵館、一九六七年六月)
- (10) 廣田哲通「『鎮増私開書』からみた直談・談義(下)」(『春秋』三二五号、一九九一年一月)
- (11) 鈴木英之「真誉相関撰『了誉上人伝』解題・翻刻」(『中世学僧と神道——了誉聖岡の学問と思想——』勉誠出版、二〇一二年八月)
- (12) 玉山成元「了誉聖岡の生涯」(『三康文化研究所年報』二三号、一九九一年三月)
- (13) 瓜連町史編さん委員会『瓜連町史』第六節「中世の寺院の信仰——一、浄土宗と常福寺」(茨城県那珂郡瓜連町、一九八六年七月)
- (14) 伊藤正義前掲論文注 6

- (15) 今泉淑夫『禅僧たちの室町時代 中世禅林ものがたり』吉川弘文館、二〇一〇年十月
- (16) 村井康彦「会所の文芸(中)——日本文化小史15——」(『日本美術工芸』三四七号、一九六七年八月)、島尾新「会所と唐物——室町時代前期の権力表象装置とその機能」(鈴木博之他編『中世の文化と場』東京大学出版会、二〇〇六年五月)。
- (17) 以下、引用は『群書類従』第十九輯に拠り、原漢文を私に漢字平仮名交じり文に改めた。
- (18) 筒井絃一「鬪茶の研究」(『茶湯』一号、一九六九年七月)
- (19) 谷晃「喫茶往来——鬪茶会のありさまを描く——」(『茶道雑誌』第六一卷九号、一九九七年九月)
- (20) 『浄土宗全書』第十七卷(山喜坊仏書林、一九七〇年九月)
- (21) 鈴木英之「鳳誉鸞州撰『了誉聖罔禅师絵詞伝』乾・坤——解題と翻刻——」(『論叢 アジアの文化と思想』十九号、二〇一〇年十二月)
- (22) 前掲資料注20
- (23) 前掲資料注20
- (24) 山岸徳平『堤中納言物語語評解「よしなしごと」』(有精堂出版、一九五四年十一月)
- (25) 井出幸男『中世歌謡の史的研究 室町小歌の時代』(三弥井書店、一九九五年二月)
- (26) 吾郷寅之進『中世歌謡の研究』第四章三「禅林文学と閑吟集歌謡」(風間書房、一九八一年三月)。小笠原恭子『閑吟集』——編者像夢想——(『室町芸文論攷』三弥井書店、一九九一年十二月)。
- (27) 新潮日本古典集成(新潮社、一九八二年九月)
- (28) 前傾論文注2
- (29) 『浄土宗全書』第十三卷(山喜坊仏書林、一九七一年二月)
- (30) 拙稿『当麻曼陀羅疏』所収説話出典考(『人間文化論叢』四卷、二〇〇二年三月)、拙稿『大経直談要註記』所収説話出典考(『富士論叢』五三卷一号、二〇〇八年九月)。
- (31) 「中世後期浄土宗における禅宗的要素」(『禅とその周辺学の研究 竹貫元勝博士還暦記念論文集』永田文昌堂、二〇〇五年一月)